

表題には、理解、誤解、超読解と並べたが、私の報告の中心となるのは「超読解」であり、「誤解」と「理解」については簡単に触れるにとどめる（なお、報告の主たる材料となるのは、アリストテレスのテキストが比較的詳しく論じられている初期の著作GA61, 62, 18, 19である）。

私が「誤解」と呼ぶのは、古典学者たちにとっては受け入れがたいハイデガーのテキストの読み方のことである。「古典学者はハイデガーのことなど相手にしない。そうする少数の者もたいてい嘆かわしく思う」。—これは、ハイデガーの古典ギリシア文献の解釈にもある意義を認めうると主張する例外的な論者の報告である。この現状認識はただしく、またこの現状には正当な理由がある。

私が「理解」と呼ぶのは、ハイデガーの解釈に含まれている視点ないし問題意識がアリストテレスを読む上でも有意義であると思われる場合のことである。たとえば、『存在と時間』33節との背景にある『ソフィスト講義』や『アリストテレス哲学の根本諸概念』におけるロゴスと真理性にかかわる議論である。アリストテレスにひきつけてまとめれば、ハイデガーは(i)「ロゴスは何かについてのロゴスである」というプラトンの『ソピステス』での規定とアリストテレス『命題論』の言明の理解、さらに『魂について』でのロゴス、ヌースやドクサ、感覚知覚の考察とを関係づけ、ロゴスはそもそも世界のあり方とかかわるものだ、という視点を魂の能力のあり方とも関係させて考察している。つまり、個人の心的状態や判断の成立と世界のあり方を独立別個の事象としてとらえてその間の関係・妥当性を問うという問題設定を拒否している。アリストテレスの個々のテキストの読み取りだけからは、こういう大きな見通しはなかなか見えてこない。こうした問題意識をもちつつアリストテレスを読むことは、アリストテレス研究者にとっても意義があるだろう。

「超読解」とは、ハイデガーの読み方のある特徴を示すために私が間に合わせにつくった言葉で、上記の意味での「誤解」に含めてもよいのだが、「超訳」という言葉から連想される特質とともに、アリストテレスが設けた諸概念や理論の仕切りを飛び越え、アリストテレスの思考からはみ出している、という意味で「超越的」である局面をも指している。

その事例を、「アリストテレスの哲学の根本概念そのもの」(GA18:22)とされるウーシアーの概念について見てみよう。ハイデガーの解釈の方向は、「あるもの、およびあるの意味の問題(ὄν - οὐσία - κίνησις - φύσις)」(GA 61:112)のギリシア語の連なり方に図式的に示される。単純化するとハイデガーはアリストテレスの術語的ウーシアーがこの語の通常用法に含意されていた意味を顕在化させたものと考えて、(i)通常の意味から彼の考えるアリストテレスのウーシアーの概念を取り出し、(ii)このウーシアーの概念を『自然学』での動(キーネーシス)と関係させつつ、(iii)現在性や被制作性といった性格を見出している。

まず大きな問題から指摘しておこう。アリストテレスのウーシアーの概念は、通常ウーシアー概念に潜在している意味を独自の仕方と読みとって形成されたのではない。「ウーシアー」という言葉はプラトンによってその意味と重要性にある飛躍が与えられた。とりわけ「～とは何であるか」というソクラテス的問いとの関係は肝要である。アリストテレスもそれを継承し、『カテゴリー論』および『トポス論』において、日常の言語使用とりわけ対話問答の実際に即して、そこに現われるわれわれの基本的なものの見方を整理する術語として導入している。そこには何も隠されていない。

これに対してハイデガーはウーシアーの通常の意味から独自に読み出したウーシアーの意味を『自然学』の動の概念へと結びつけて解釈するが、そもそも『自然学』の運動変化の分析自体がすでに見たウーシアーの概念を前提としている。他方でウーシアーそれ自体が詳しく分析される『形而上学』

は、『自然学』での分析を踏まえながら、「ある（もの）をあるというかぎりにおいて考究する」という別の視点からの考察である。ハイデガーのアリストテレスの読み方は、アリストテレスが設定した知の仕切りと秩序を無視している。個々のテキストの解釈についての数多くの疑問をあわせて考えるとき、ウーシアアの「現在性」と「被制作性」という根本性格を取り出すハイデガーの手つきは、手品師のそれに近い。

さらにハイデガーの読解は、以上のような読解から導かれた現存在（Dasein）としてのウーシアアから、ホリスモスについての独特の考察をへて、「ロゴスをもつ人間」という政治学の議論へと向かう。これもまた、アリストテレスの知の区分を「乗り越える」超読解の例である。その結果帰結するのは、「存在論的政治学」なる、非ないし反アリストテレス的な政治学である。

ハイデガーとアリストテレスの複雑な関係を論ずるためには、両者の対話とか対立といった関係の設定以前に、以上に見られるような両者の隔たりの認識を出発点したほうがよいだろう。